

[0027]九州大学生体防御医学研究所年報 : 2012

<https://doi.org/10.15017/26861>

出版情報 : 九州大学生体防御医学研究所年報. 27, 2013. 九州大学生体防御医学研究所
バージョン :
権利関係 :

平成24年度（2012／2013年）の研究活動の概況

生体防御医学研究所・所長

佐々木裕之

（ささきひろゆき）

生体防御医学研究所は温泉治療学研究所及び医学部附属癌研究施設を改組・統合して昭和57年4月に創設され、平成24年度を以って30周年を迎えました。本研究所は生体の恒常性を維持するために重要な「生体防御」を研究テーマに据え、生命現象の本質に迫る基礎研究を展開すると共に、生体防御機構の破綻による疾患の発生機序の解明と診断、治療法の確立を目指した研究を展開しています。これまでも国内屈指の研究実績を誇り、国際的にも高い評価を受けて参りましたが、平成22年度より全国共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」に採択され、真に世界的な研究教育拠点を目指しています。平成24年度の主な活動状況は以下の通りです。

1. 平成25年2月16日に生体防御医学研究所創立30周年及び九州大学病院別府病院創立80周年記念式典、記念講演、記念祝賀会を開催した（ホテル日航福岡）。（詳細は後述。）
2. 平成24年5月13日に九大百年まつり・市民公開講座「九大発！最先端のサイエンス～社会への新たなメッセージ～」を開催し、教員2名が市民向け講演を行った（伊都キャンパス）。
3. 平成24年6月14、15日に開催された第7回研究所ネットワーク国際シンポジウム「Research Frontiers for Smart Aging」に参加し、発表や討議を行なった（東北大学加齢医学研究所）。
4. 平成24年12月2～4日に橋本病百周年記念国際シンポジウム（Centennial of Hashimoto Disease International Symposium）として第22回ホットスプリングハーバーシンポジウム・生医研30周年記念国際シンポジウム「自己免疫疾患の病因解明と治療法開発への挑戦（Autoimmune Disease: Etiology and Therapeutics）」を開催し、活発な討議を行なった（アクロス福岡）。
5. 先端的な研究を積極的に推進し、Cell誌をはじめとする欧米トップジャーナルに研究成果を発表し、大学ホームページやマスコミにより紹介された。インパクトファクターが10を越える雑誌に掲載された論文数は6本であった。
6. 教員1名が2012年度日本遺伝学会木原賞を、1名が第10回日本分子生物学会三菱化学奨励賞を受賞し、1名が戦略的創造研究推進事業（CREST）に、1名が戦略的創造研究推進事業（さきがけ）に採択された。
7. 全国共同利用・共同研究拠点「多階層生体防御システム研究拠点」（平成22年度～平成27年度）として公募により50件の共同研究、3件の研究集会を採択し、実施した。
8. 特別経費（プロジェクト分）「新世代プロテオミクス技術によるシグナル伝達経路全貌解明」（平成22年度～平成27年度）により研究を推進した。

9. 研究所内各研究室の交流の場として平成24年5月9日に親睦会（病院キャンパス、コラボ・ステーションII）、8月20、21日に第15回生体防御医学研究所リトリートを開催し、5題の優秀口演賞（うち最優秀賞2題）、4題の優秀ポスター賞（うち最優秀賞1題）を選出した（ホテルセキア、熊本県南関町）。
10. 国内外から第一線の研究者を招聘して合計27回の生医研（多階層生体防御システム研究拠点）セミナーを開催し、活発な討論を行なった。
11. 若手を育成するテニュアトラック教員としてシステムコホート学分野に准教授1名が着任した。また、平成25年3月末日を以て稲葉謙次准教授が東北大学多元物質化学研究所教授に栄転し、服巻保幸教授が停年退職した。
12. 九州大学の大学改革活性化制度を活用し、平成25年度から遺伝情報実験センターを改編してトランスオミクス医学研究センターを設置することが決定した。これにともない、大学本部から1分野の増設が認められた。

大学附置研究所においては、高品質で独自性の高い最新の基礎研究成果の情報を発信することはもちろんのこと、社会貢献・国際貢献の活動を社会に対して目に見える形で示すことで、コミュニティでの存在感を高めることがますます重要となってきています。これらの課題に適切に対応するため、今後とも生体防御医学研究所教員・学生・スタッフ一同、より一層の努力を行う所存です。何卒、ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

平成25年4月1日